
異世界コンビニ繁盛記～そのババナ胸の谷間で温めましょうか？～

鳥居なごむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界コンビニ繁盛記〜そのババナ胸の谷間で温めましょうか？〜

【Nコード】

N0263Y

【作者名】

鳥居なごむ

【あらすじ】

ある日、突然、バイト先のコンビニもろとも異世界に飛ばされた逢坂仁。ほかのクルーたちと協力して異世界でコンビニを繁盛させる話です。四コマ漫画を読むような気軽さでお楽しみください。

一幕 ある日の出来事

話をしよう。

例えば無人島になにか一つだけ持っていけると聞かれた場合、僕は「女の子（ただし美少女に限る）」と即答したいのだが、実際問題そんな勇敢さは変態扱いされて一巻の終わりである。つまり言いたいことも言えない世の中なわけで、僕は妥協に妥協を重ねた回答を質問者へ返すのだった。

「話し相手——ですかね」

「そっちなあ。読み違えたわ」

巫条さんあいたたたという風に額へ手を当てながら謎の発言をする。見た目は綺麗なOLさんといった感じなのだが、中身は完全なセクハラ親父という残念な副店長だ。ちなみに名前は巫条葵、年齢は二十代半ばくらい。コンビニの夜勤シフトで週二回ほど顔を合わせているだが、さすがにこちらから女性の歳は聞けないので詳細不明のままである。

「どういうことですか？」

「いやあ、逢坂なら高級ラブドールを選ぶと思ってさ」

ほら、残念な人だろ？ 折角の美貌を微塵も活かさない女性なのだ。

「修正するからちよつと待ってな」

そんなことを言いながら巫条さんはタブレット型端末を操作する。発注をするための機械なのだが、これまた正式名称は知らない。僕

は嘆息を漏らしつつ疑問符を投げかけた。

「入力ミスですか？」

「いや、誕生日の近いクルーにそれとなく無人島の質問をして調査してるんだ。欲しい物を直接聞くより深層心理が知れて面白いからさ」

「ん？ ちょっと待つてください。それって選んだ物をプレゼントしてくれるってことですか？」

「まあ、その予定だ」

巫条さんは思いのほかあっさりと肯定する。僕としては三つの重大な突っ込みを行わなければならないだろう。

「僕の回答を高級ラブドールと決め打ちしたんですか！ あと話し相手とかどうするんですか！ というか高級ラブドールってコンビニで発注できるんですか！？」

「その一、決め打ちしてた」

まず副店長は左手の人差し指を立てた。次いで中指も立てる。

「その二、話し相手は私だ」

最後に薬指を加えて巫条さんは告げた。

「その三、コンビニで買えないものは愛だけだ」

「そんなキメ顔で言わないでください！ 大して上手くもないですから！」

僕の突っ込みに副店長は腹を立てるわけでもなく同意する。

「私も上手いとは思ってないからな。ただ一度言っていた台詞みたいなのあるだろ？」

「例えば『俺の屍を越えて行け』みたいな？」

「まあ、逢坂の絶望的なセンスはともかくそういうことだな。私なんて『前の車を追ってくれ』と言っためにタクシーに飛び乗って休日と十万円を無駄したことがある」

「ある意味で人生、終わってますね」

とまあ。

こんな馬鹿話をバイト先のコンビニでしていたわけである。時刻は夜勤帯の終盤。あと十数分もすれば朝勤の女子がやってくる時間だ。少なくともこのときはまだ、いつもと変わらない平穏な日常を疑いもしなかった。

午前五時五十分。

自動ドアが開いて、三人の女子が入ってくる。

「おはようございます」

「おはよーっす」

「おはようございます」

三者三様の挨拶を済ませてバックルームへ向かっていく。それから少し経ってメタバを画に描いたような店長が自動ドアを抜けてくる。

そのときだった。

地鳴りのような鈍い音と激しい揺れが起こる。そんな中、僕は声を大にして叫んだ。

「一話目からオチがない！」

二幕 そして異世界へ

「なあおい、外の様子が変だぞ」

外に最も近いメタバ店長が不安げに言葉を絞り出した。その声に釣られて僕は外界を見やる。アスファルトで舗装された道路は土が剥き出しの地面と化し、見渡す限り顔を上げなければならないような高い建物は存在しない。もっと端的に表現すればゲームにおけるファンタジー世界の風景が広がっているのだった。

「な……なにが起こったんですか？」

ふらふらと自動ドアへ向かう僕を巫条さんが引き止める。振り返るとガスマスク付きの防護服に身を包んだ謎の人物がそこにいた。

「待ちなさい。外が地球と同じ環境とは限らないのよ」

突っ込みどころが多過ぎて逆に突っ込めない状況で正論を語られる。

「……というかその装備どこから出てきたんですか？」

「こんなこともあるつかと発注しておいたのよ」

「……………」

返す言葉が出て来なかった。

「ちょっと舞ってなさい」

「この状況で踊らなきゃ駄目ですか？」

「失礼。待ってなさいと間違えたのよ」

空気が死ぬような寒い言葉遊びを終えると、巫条さんは子機のような物体を持って外へ向かう。しばらくすると防護服を脱いでガスマスクを外した。おそらくなにかしらの測定で問題なしという結果が出たのだろう。店内へ戻る途中で話しかけてきた店長が鬱陶しかつたのか、笑顔で相槌を打ちながら鈍器のようなもので殴り倒していた。

「有害な物質は確認されなかったわ。それに――」

言いながら巫条さんは天井を見上げた。その後に店内を見回し始める。

「逢坂、水が出るか確認してくれないか？」

指示に従って僕はレジの後ろにある洗い場の蛇口を捻った。当然のように水が流れ始める。緊急時用の貯水タンクなんてないだろうから、これは純粹に水道が生きていることを示していた。

「電気や水といったライフラインは生きているわけだな」

「一体どうということなんですか？」

「さあ、それがわかったら苦労はないだろ」

そう告げて副店長は防護服を抱えたまま肩をすくめた。その後ろでは自動ドアにギロチン状態で首を挟まれたメタバ店長が何度も何度も入店時の「ピロピロピローン」という音を奏でている。かなり凄惨な光景なのだが、どういうわけか笑いが込み上げてくる。しかしこのまま放置するわけにもいかなないので、僕は何食わぬ顔をしている巫条さんに疑問符を投げかけた。

「今コンビニが元の世界に戻ったら店長の首だけ異世界に残るんですかね？」

「ああ——それは可哀想ね。ちゃんと全部外へ出しておきましょう」

言っが早いか店長の身体を外へ追い出そうとする副店長だった。

「優しさが間違ってる！」

第三幕 武器

「コンビニの武器と言えばカラーボールっすよね」

朝勤の宮原明日美が満面の笑みを浮かべて微笑む。長い黒髪を左右で縛ったツインテールと豊満な胸が特徴的な元氣印娘である。元から朝に客足の多い店だったのだが、この子を雇ってからさらに増えたことは言うまでもない。コンビニが異世界へ飛ばされたと知ったときも、なんとも朗らかな表情で「なんとかなるっすよ」とムードメーカーになっていた。これはもう純心とか天然なんじゃないくて、ただ単に馬鹿なんじゃないかと疑い始めたのは内緒である。

「うーん、あんまり強力な武器とは言えないよ？」

「そんなことないっすよ。時速百六十キロで正確に眉間を捉えれば計り知れないダメージを与えられるはずっす」

明日美はカラーボールを投げる素振りを見せながら力説する。

「うん、時速百六十キロを出せる剛腕と正確に眉間を捉えられる制球力があつたらコンビニでバイトしてないけどね」
「どうしてっすか？」

きょとんとした表情を浮かべる少女。だから僕はできるだけ正確に真実を伝えておく。

「そんなすごい奴がいたら高野連が放っておかないだろうからね」
「先輩は物知りっすね」

そんな穏やかな会話を楽しんでいると、巫条さんが下卑た笑み

を口許に湛えながら近付いている。どうやら癒しの時間は終了らしい。明日美は副店長の顔を確認すると丁寧に一礼していた。

「朝一から伏せ字トークは感心しないな」

「僕らのトークに伏せ字が必要な箇所は一つありませんよ。むしろ巫条さんの存在そのものを伏せておいてください」

「……年下の男子に辛く当たられるプレイも悪くはないな」

そんな分析を真顔で行う巫条さんだった。明日美は意味がわからないのか頭の上に疑問符を浮かべている。

「冗談はともかく、異世界での自己防衛手段は無視できないな」

「そうなんすよ、どうしてコンビニは武器を取り扱ってないんすか？」

「たぶん『もしコンビニが異世界に飛ばされたら』という状況を想定してないからじゃないかな？ あと刀や銃火器の売買は法律で禁じられているからかもしれないね」

僕は明日美の自尊心を傷付けないように正論を述べておく。

「まあ、異世界と言えばチート能力が基本。主人公が最強という安心仕様なわけだな」

「それ……かなり偏った世界の常識な気がしますけどね」

「とりあえず十円玉とか指で弾いてみるよ。超電磁誘導とか起こるかもしれないからな」

「先輩ならできるっすよ」

明日美が熱い眼差しを向けてくる。仕方なく僕はレジから十円玉を取り出した。親指を強く引き上げれば十円玉を前方へ弾き出せるように構える。

「行きますよ？」

「うむ」

巫条さんの首肯を合図に僕は十円玉を全力で弾いた。次の瞬間、超加速した銅の塊はまるで弾丸の如く自動ドアを突き破り彼方へと消えていく——なんてことは当然起こらない。しょぼい軌道で数メートル飛んだあと、大理石の床に落下して甲高い音を奏でるだけだった。転がる十円玉を明日美が無言で拾ってレジへ戻す。このとき僕は空気が死んでいる状態を初めて肌で感じた。

「これが現実だ」

「知ってました」と僕は無気力に返しておく。

第四幕 心配なんです

ある日の夜。

路地裏にあるゴミ捨て場での出来事。

「怖くないよ、ほら、こっちおいで」

その場に座り込んでいるのは少女だった。ちちと音を立てながら暗闇に向かって手招きをしている。ふわふわ髪で可愛い声を出す少女に僕は見覚えがあった。

「あれ、こんなところでなにをやってるんですか？」

「あ、逢坂くんだ」

振り向いた少女——八田杏奈は嬉しそうに微笑む。どの角度から見ても膨らみが確認できる素晴らしい巨乳の持ち主なのだが、今回のように真上から見下ろすと胸元の谷間が豪いことになっているので視線を逸らした。動揺を隠すために繰り返し質問を投げかける。

「あの、ここでなにを？」

「あそこにいる黒猫さんに餌をあげようと思ったんです。それなのに怖がっているのか呼びかけても近寄って来ないんですよ。もう十五分くらい呼んでるんだけどなあ」

そう言つて杏奈は暗闇の一点を指差した。示された暗がりを目を凝らして確認する。確かに室外機の上に黒色と判別できる物体があった。大きさ的にも猫と同じくらいである。しかしそれはどこをどう見ても自転車のサドルだった。

「八田さん、あれは黒猫じゃなくて自転車のサドルです」

自尊心を傷付けることなく残酷な真実を伝える方法など存在しないだろう。だから僕は心を鬼にして杏奈の無為な時間に終止符を打つ。恥ずかしい勘違いを携帯の動画に収めて、ちょっとした弱みを握っておこうなんて考えもしない。

「え？」

大きな瞳をぱちくりとさせて、杏奈は暗がりの方へ近付いていく。そして自転車のサドルを軽く撫でた。もしここで少女が自転車のサドルを黒猫だと言い張ったら、僕はこれまで培ってきた価値観を捨てても自転車のサドルを黒猫と認めていただろう。

しかしである。

「恥ずかしい……皆には内緒ですよ？」

振り返りながら杏奈は左手の人差し指を唇に添えて恥ずかしそうに照れ笑う。その姿は天使そのものだった。

「——という出来事が先週あったんですよ」

「異世界に飛ばされる前の話だな。それがどうかしたのか？」

聞き手の巫条さんが先を促してくる。だから僕は正直な気持ちを吐露した。

「八田さん、ぼやんとしたところがあるから心配なんです」

「まあ確かに、異世界の住民が友好的とは限らないからな」

「髪型をポニーテールにされたり黒と赤の格子柄ミニスカートに黒のニーソックスを合わせられたり胸を強調することしか考えていないような破廉恥な服を着せられたり赤縁の眼鏡をかけられたり女豹のような姿勢を取らされたりしないか心配なんです！」

「私はそんな心配をする逢坂のほうが心配だけだな」

第五幕 メタボリック店長

「いや、だから異世界に飛ばされたんですって！ 外の景色が中世の諸外国みたいなことになってるんですよ！ えっ……いい医者を紹介してやるから本部に來い？ だから行きたくても行けないって言ってんじゃないですか！ 午前六時からの上が百二十円しかない？ そりゃそうでしょう！ 俺が缶珈琲を購入しただけですからね！ えっ……こつちでの売上が認識されるなら問題ない？ 異世界支店として頑張れ？ 気楽なこと言ってるじゃねーぞ馬鹿野郎！」

本部へ連絡を入れたメタボ店長は受話器越しに怒鳴り散らしている。しかしなんというか、本部の対応もわからなくはない。いきなり「異世界に飛ばされました」なんて連絡を受けたら、非暴力主義の偉人だって助走をつけて殴りかかってくるだろう。

「ん……綺麗なエルフのお姉さんが働いている風俗店があるかもしれない？ ふむふむ……幻獣の世界には美貌の女が多いんですね？ わかりました。まずは異世界の環境を把握し、この地域に密着した店作りを心がけます」

電話を切った店長は休憩中の俺に告げる。

「異世界の環境を調査してくる」

「ちょっと待ってください！ 元の世界へ戻る方向で頑張りましたよー！」

「逢坂、たとえ異世界へ飛ばされても仕事は仕事だ」

「風俗行く直前にやけた顔で言われても説得力ありませんって！」

「馬鹿野郎！ 綺麗なエルフのお姉ちゃんと『にやんにやん』する機会なんてこれを逃したら一生ないかもしれないだろーが！」

仕事では一切見せない苛烈な迫力があつた。

刹那、店長は背後から忍び寄った巫条さんにスタンガンを押し付けられる。

「ぐあっ！」

短い悲鳴を上げてメタボ店長は床に倒れた。次いで副店長はその巨体を引き摺って用具室の中へ押し込む。最後に外から南京錠をかけて完全隔離に成功した。

「二週間くらい反省させておこう。そうすれば少しは大人しくなるだろ」

「いやいやいや、それもう大きな古時計状態になりますから！」
「ん？」

巫条さんは一瞬だけ首を傾げてから閃いたように手を打つ。

「逢坂、休憩終わったらオリコンの片付けだからな」

「感想なしかよ！」

そんなわけで閑話休題。

バックルームから店舗へ戻ると積み上げられたダンボールと十箱くらいのオリコンが視界に入った。ちなみにオリコンというのは様々な雑貨や日用品が詰め込まれた折り畳み可能なプラスチック製の箱である。

察しのいい読者諸兄は理解してくれることだろう。

俺は一呼吸置いてから副店長の名を呼んだ。

「巫条さん、元の世界へ戻れるかもしれません！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0263y/>

異世界コンビニ繁盛記～そのババナ胸の谷間で温めましょうか？～

2011年11月3日03時15分発行